

●「職人歌合」とは

「職人歌合」は、諸種多様な職人を網羅し、その風俗を主題として描いた「職人尽絵」の一種で、各々の職人について和歌を添え、それを歌合の形式として描いたものである。「番」とは「つがう」の意味で、各職人が左右に對で描かれ、各々がその職業にちなむ和歌を詠って優劣を競う方式をとっている。和歌（歌合・大和絵（歌仙絵）・職人という様々な日本古来の伝統に根ざした文化が融合し、成立したものであるといえよう。中世日本の歴史・文化・技術・風俗を伝える稀有な資料である。

現存する「職人歌合」には、『東北院職人歌合』『鶴岡放生会職人歌合』『三十六番職人歌合』『七十一番職人歌合』の四種が知られ、前二者が鎌倉時代、後二者が室町時代の成立とされる。特に『七十一番職人歌合』は百四十二種もの職人を掲出する最大のものであり、他の職人歌合に見えない画中詞（和歌とは別に職人の口上や会話を記したものを）を記載するなど、特筆すべき特徴を有している。

●本書の特長

・公益財団法人前田育徳会尊経閣文庫所蔵の「職人歌合」の善本三種をフルカラーで全編影印。
・『七十一番職人歌合』の最善本として知られる古本（慶安元年後水尾上皇下賜）、『同』新本（貞享元年前田綱紀識語）を対照影印。附録として『鶴岡放生会職人歌合』（松雲公（前田綱紀）模写）を影印。また、三点全ての翻刻を附した。
・「職人歌合」成立の歴史的・文化的背景、文庫所蔵の職人歌合についての書誌を詳述した解題、及び、本書掲載の「職人歌合」所収の職人につき、詳細に解説した職人解説を附した。

●もくじ

御挨拶：公益財団法人前田育徳会理事長 前田利祐

●影印―『七十一番職人歌合』古本・新本対照影印並びに古本翻刻

●翻刻―『七十一番職人歌合』新本翻刻

●附録―『鶴岡放生会職人歌合』影印並びに翻刻

●解説―職人歌合の世界：菊池紳一

「七十一番職人歌合」職人別解説：菊池紳一・塚本洋司・加藤より子

「鶴岡放生会職人歌合」職人別解説：菊池紳一・塚本洋司・加藤より子

「七十一番歌合」職人一覧

一番	番匠	鍛冶	三十七番	豆腐売	索麵売
二番	壁塗	櫓皮葺	三十八番	塩売	麹売
三番	研	塗師	三十九番	玉磨	硯切
四番	紺摺	機織	四十番	燈心売	一文字売
五番	植物師	車作	四十一番	牙脣	蔵回
六番	鍋売	酒作	四十二番	枕巻	櫛挽
七番	油売	餅作	四十三番	瓦焼	笠縫
八番	筆結	蓑作	四十四番	袴巻切	鞍細工
九番	炭焼	小原女	四十五番	幕露	通事
十番	馬賣	皮賣	四十六番	文者	弓取
十一番	山人	浦刈	四十七番	白拍子	曲舞々
十二番	木伐	草刈	四十八番	放下	鉢叩
十三番	烏帽子折	扇売	四十九番	田楽	猿楽
十四番	常売	白物売	五十番	縫物師	組師
十五番	蛤売	魚売	五十一番	糺物師	量紙造
十六番	弓作	弦売	五十二番	葛籠造	皮籠造
十七番	挽入売	土器造	五十三番	矢細工	籠細工
十八番	饅頭売	法論味噌売	五十四番	幕目割	行燈造
十九番	紙漉	賽馬	五十五番	金掘	糸掘
二十番	紙漉	賽馬	五十六番	包丁師	調菜
二十一番	傘張	足駄作	五十七番	白布売	直垂売
二十二番	御簾編	唐紙作	五十八番	宇売	綿売
二十三番	一服	銭	五十九番	藥物	相撲取
二十四番	証書	法師	六十番	山伏	持者
二十五番	証書	法師	六十一番	禪馬組	相撲取
二十六番	証書	法師	六十二番	禪馬組	相撲取
二十七番	証書	法師	六十三番	禪馬組	相撲取
二十八番	証書	法師	六十四番	禪馬組	相撲取
二十九番	証書	法師	六十五番	禪馬組	相撲取
三十番	証書	法師	六十六番	禪馬組	相撲取
三十一番	証書	法師	六十七番	禪馬組	相撲取
三十二番	証書	法師	六十八番	禪馬組	相撲取
三十三番	証書	法師	六十九番	禪馬組	相撲取
三十四番	証書	法師	七十番	禪馬組	相撲取
三十五番	証書	法師	七十一番	禪馬組	相撲取
三十六番	証書	法師			

●公益財団法人前田育徳会尊経閣文庫について

加賀前田家の収集した図書・古文書を研究者に公開する図書館（特殊文庫）。財団の通称となっている「尊経閣文庫」の名は、設立者前田利為（第十六代目当主）によつて、新設の図書閲覧所に名付けられたもの。文庫名の由来は、直接的には、明治時代以来前田家の蔵書のことを「尊経閣」と呼んできたことにちなむ。この名称はさかのぼれば、江戸時代に、加賀金沢藩主前田綱紀（二六四三―一七二四）が自身の蔵書を父祖の蔵書と区別して「尊経閣蔵書」と呼んだり、収集した書物を分類・

格付けして、その一類に「尊経庫蔵書」と名付けたりしたことから、「尊経」の二字をとつて命名されたものである。架蔵の指定文化財は、典籍を中心として、国宝二十二件、重要文化財七十六件を数え、その質と量と、わが国有数の文庫といえよう。公益財団法人前田育徳会は、尊経閣文庫の図書を含めて、加賀前田家に伝来した文化財全般を所有し、社会の大切な共有財産として、現在及び後世のために護持・公開する、社会教育を目的とした公益法人として活動している。

前田育徳会尊経閣文庫所蔵

七十一番 職人歌合

諸種多様な職人の風俗を
絵画と和歌により
描き出した「職人歌合」。
中世日本のひとびとの
営みを伝える最善本を
全編フルカラーで紹介。
当該期の歴史・文化・技術・
風俗研究における貴重資料。

公益財団法人

前田育徳会尊経閣文庫「編」



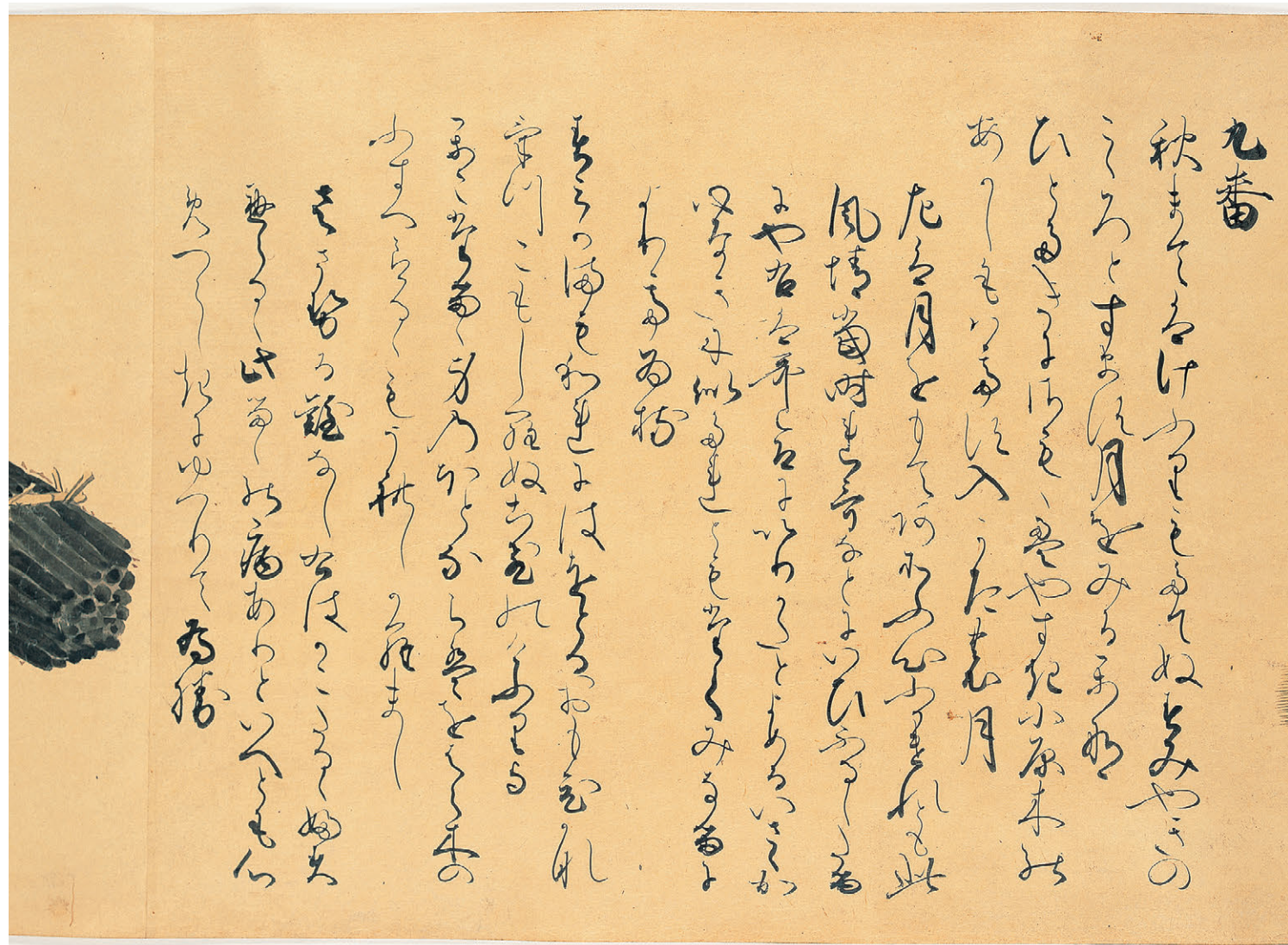
勉誠出版

書名	冊数
前田育徳会尊経閣文庫所蔵 七十一番職人歌合 公益財団法人前田育徳会 尊経閣文庫「編」	冊
ご送付先・通信欄	

〒101-0051 千代田区神田神保町 3-10-2 TEL=03-5215-9021 FAX=03-5215-9025
E-mail=info@bensei.jp Website=http://bensei.jp

勉誠出版

書店番線印



〈原寸内容見本〉

上段に『七十一番職人歌合』古本を、下段に古本の翻刻と新本の同場面を掲載。ここに掲載した第九番は、炭焼と小原女を対にしたもの。炭焼は、木を蒸し焼きにして木炭をつくる人のことである。小原女は「大原女」とも書き、山城国愛宕郡大原（京都市左京区大原）に住み、小原木を頭にのせて、京都の町で行商をする女性のことである。小原木は、かまどで蒸して黒くした薪のことで、産地の地名から名付けられた。小原女の起源は、朝廷に納めた余剰物を大原の女性が売り歩いたことに始まると考えられている。

本文は、最初に「月」を題材としたそれぞれの立場からの和歌とその判じ、次に「恋」を題材にした和歌と判が下されている。



九番

秋まては、けふりもたてぬすみやきの
こころとすます月をみるかな
（心）
（炭）
ひとたきにさもゝえやすき小原木の
あかしもハてす入かたの月

左は、月をもてあそふ心ふかけれとも、此
風情当時連哥などにいひふるしたる
にや、右は、哥合にいりかたとよめる、いさゝか
心なきに似たれとも、たくみなるに
よりて為持、
（炭）
（我）
（思）
すみかまもわれにはをとるおもひかな
けつこもしらぬこひのけふりよ
（恋）
かこたるゝ身のほとならはをばら木の
ふすへらるゝもうれしからまし
（小原）
（思）
左、させる難なし、右は、かこたるゝ、ふす
へらるゝ、此るゝの病ありといへとも、心
めつらしきにゆつりて為勝、
（珍）

（炭焼）
すみやき
けさいて、
さいまう
たか、
あこせハ、
まいりあひ
て候けるか、
（小原女）
をばらめ